| 群教セ | G01 － 03 |
| --- | --- |
| | 令3.278集 |
| | 国語－中 |

# 話の構成を工夫して<br>話すことができる生徒の育成

## ――構成を可視化する「トークプラン」の活用を通して――

特別研修員　見城　由昭

## Ⅰ　研究テーマ設定の理由

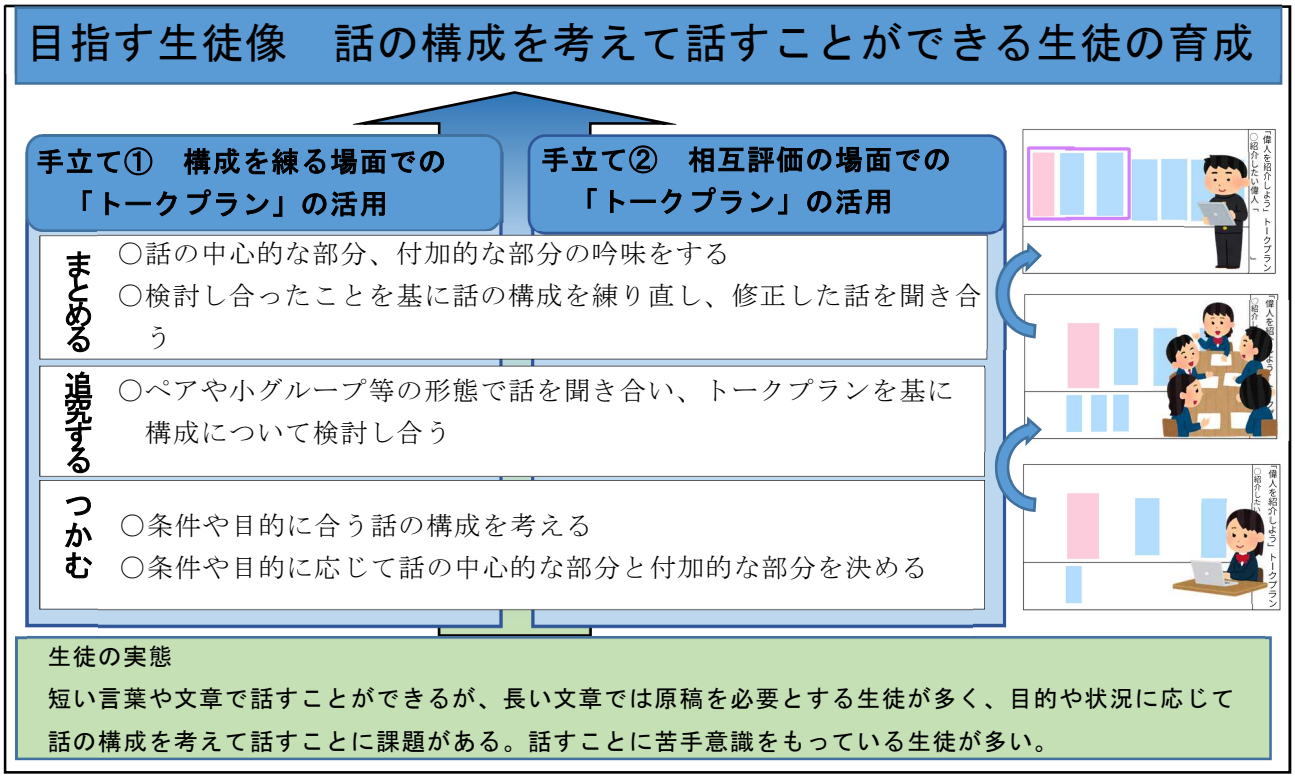
第１学年「Ａ話すこと・聞くこと」（１）イについて、令和２年度全国学力・学習状況調査並びに調査問題活用の参考資料では、「伝える事柄や事実と、それに対する自分の考えや感想などとの関係に注意して話すように指導することが大切」とあり、また、「何のために報告したり紹介したりするのかという目的や、相手はその話題についてどのような点に関心があり、どのような情報をすでに持っているかなどの状況によって、報告や紹介の仕方が変わってくることに留意するように指導すること」と示されている。

研究協力校の生徒は、まとまりのある文章で話す場面においては、予め用意した原稿を読み上げたり文章を暗記して発表したりすることに終始してしまう傾向があり、様々な目的や状況によって話の構成を練り直すことに苦手意識があると考えられる。また、聞く活動では、相手の話の中心的な部分に留意して聞いたり、効果的な話し方について助言したりすることに課題がある。

そこで、話の構成を練るためのワークシート「トークプラン」を活用し、話す場面の状況や目的に応じてどのように構成すればよいかを考えさせる活動を設定する。さらに、構成に気を付けながら相手の話を聞き、構成にどのような意図があるかを相互評価し合う場面でトークプランを活用することで、話の構成を工夫して話すことができる生徒を育成できると考えた。

## Ⅱ　研究内容

### １　研究構想図



## ２　授業改善に向けた手立て

生徒が、話の構成を工夫して話すことができるようになるための方法として、以下の手立てを通して授業改善を図ることとした。

**手立て１　構成を練る場面での「トークプラン」の活用**

話の中心的な部分と付加的な部分を明らかにして話の構成を練るため、ICT 端末を使用してトークプランを作成する。トークプランとは、話す内容をカードに入力し、可動化することで生徒が伝えたいことや練り直した構成の変容を可視化することができるものである。トークプランを使用して構成を考えたり、話の中心的な部分や付加的な部分を吟味したりして、目的や条件に合わせて構成を練り直す活動を取り入れていく。

**手立て２　相互評価の場面での「トークプラン」の活用**

構成を考える段階で互いのトークプランを比較して、話の中心的な部分と付加的な部分やカードについて意見を交流する活動を設定する。さらに、トークプランを使用して互いに話を聞き合い、話の中心的な部分が目的や状況に合っているか、効果的な話し方になっているかなどについて検討し合う活動を設定する。ペアやグループ、学級全体など、形態を工夫して相互評価する活動を取り入れていく。

# Ⅲ　研究のまとめ

## １　成果

○　トークプランを用いたことによって、スピーチの構成を考える個の学びにおいて何度も構成を考えたり、繰り返しスピーチをしたりと試行錯誤を繰り返していた。うまくいかない部分についてトークプランを何度も操作し、より自分の思いが伝わる話の構成を練ることができた。また、スピーチの条件や目的を指定することで構成を考えようとする必要感をもたせることができ、その条件に合わせた構成を練ることができた。

○　ICTを活用したことで本時と前時のトークプランを比較して考えることが容易になり、前時と異なる目的や条件に応じて具体的な説明や例を付け加えたり、色分けによって中心的な部分と付加的な部分を組み立てたりすることができた。

○　互いにスピーチを聞き合うことで相手の工夫していることやよかったことなどを自らのトークプランに還元することができた。多くの考えに触れるために、ペアやグループ、学級と形態を変えて相互評価を行うことで、自分の考えを明確になるように中心的な部分を軸に話を組み立てることができているか、話の構成が条件や目的に適していたかどうかなどについて検討し合うことができた。

## ２　課題

○　支援を要する生徒の中には、話の中心的な部分や付加的な部分が曖昧なまま、カードの話す順序を考えることに終始してしまった。与える条件に応じて、中心的な部分（本単元では最も伝えたいこと）が視覚的に分かるような手立てが必要である。

○　トークプランを生徒同士で共有したり、編集し合ったりして集団で練り上げる場面での活用については更なる工夫が必要である。 ICTを活用することで、生徒の考えや練り合ったことなどを視覚化したり、トークプランを共同編集したり互いに助言し合ったりすることができるような手立てを考えたい。

○　今回は第１学年Ａ（１）イの学習活動に合うトークプランを作成し、実践を行った。今後は指導事項の系統性を踏まえて他学年でも使用できるトークプランの作成や、トークプランを使った構成の考え方が、学校生活や学校行事においても生きるよう工夫する余地がある。

**実践例**

## １　単元名　　構成を工夫して魅力を伝える（スピーチ）　（第１学年・２学期）

## ２　本単元について

本単元では、自分の考えや根拠が明確になるように、最も伝えたいことをスピーチの中心的な部分として、紹介する偉人についての自分の思いを聞き手に伝える活動を行う。各自が紹介する偉人は、生徒自らが話したいと思えるように、生徒の興味や関心に沿って自由に選択させる。

また、話の構成を考えさせるために、単元を通してスピーチの時間や話す相手などの条件を設定することで、毎回の授業において構成を考える必要感をもたせたいと考えた。トークプランを使用することで条件に合わせて構成を練ったり、生徒同士で内容を検討したりする活動を重点的に行う。本単元では以下のような指導計画を構想し、実践した。

| | |
|---|---|
| 目標 | 話の構成を考えてスピーチする活動を通して次の事項を身に付けることができるよう指導する。<br>ア　意見と根拠など、情報と情報との関係について理解すること。<br>（知識及び技能（２）情報の扱い方に関する事項ア）<br>イ　自分の考えや根拠が明確になるように、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考えること。<br>（思考力、判断力、表現力等　Ａ話すこと・聞くことイ）<br>ウ　言葉がもつ価値に気付くとともに、我が国の言語文化を大切にして、思いや考えを伝え合おうとする態度を養うこと。　（学びに向かう力、人間性等） |
| 評価規準 | (1)　意見と根拠の関係について理解している。【知識・技能（２）ア 】<br>(2)　「話すこと・聞くこと」において、話の中心的な部分と付加的な部分、事実と意見との関係などに注意して、話の構成を考えている。【思考・判断・表現】<br>(3)　積極的に相手と関わりながら学習の見通しをもってスピーチの構成を考え、自分の思いを相手に伝えようとしている。【主体的に学習に取り組む態度】 |

| 過程 | 時間 | 主な学習活動 |
|---|---|---|
| つかむ | 第１時 | ・話題に関心をもち、最も伝えたいことやその理由を明確にしてスピーチの内容を検討する。 |
| 追究する | 第２時 | ・短いスピーチの時間でペアの相手に分かりやすく伝えるために構成を考える。 |
| | 第３時 | ・長いスピーチの時間で小グループの相手に分かりやすく伝えるために、話の中心的な部分と付加的な部分を検討して、話の構成を考える。 |
| | 第４時 | ・スピーチ発表会をすることで相手意識をもち、条件に合った構成を考える。 |
| まとめる | 第５時 | ・単元の学習を振り返り、工夫した構成や効果的な話し方などを様々な場面に生かしていこうとする意欲を高める。 |

## ３　本時及び具体化した手立てについて

本時は全５時間計画の第３時に当たる。本時のねらいは「条件と目的に応じて話の中心的な部分と付加的な部分を検討する活動を通して、話の構成を考えることができるようにする」ことである。これを達成するための手立ては、以下のとおりである。

**手立て１　構成を練る場面での「トークプラン」の活用**

トークプランを用いて、本時の目的と条件に合うようにスピーチの構成を考えさせたり、最も伝えたいことが相手に伝わるように話の中心的な部分や付加的な部分を吟味させたりして構成を練り直していく。

**手立て２　相互評価の場面での「トークプラン」の活用**

トークプランを共有して、ペアや小グループでスピーチを聞き合う活動を設定することで、最も伝えたいことが明確になっているか、目的や条件に合う構成になっているかなどについて検討させていく。

## 4　授業の実際

本時は、前時までに作成したトークプランを基にして、新たな目的に応じた話の構成を考えることと、小グループでの相互評価をすることを主な学習方法として設定した。

### (1)　導入（つかむ場面）

スピーチの条件を45秒から90秒、話す相手をペアから小グループとすることで、話の中心的な部分と付加的な部分をどのように構成すればよいか、複数の相手に対して話し方をどう工夫したらよいのかなどについて考えさせ、話の内容をトークプランで確認し、構成を工夫していくことを伝えた。また、教師のスピーチをモデルとして聞かせて、話し方や話の構成にどのような工夫をしているかについて考えさせた。

### (2)　展開（追究する場面）

前回までに作成したトークプランを用いて構成を考える活動を設定した。これまで組み込めなかった付加的な部分や、中心的な部分をどのように構成すると効果的なスピーチになるのかを考えるよう指示し、考えたトークプランを使ってペアでスピーチをする活動を行った。

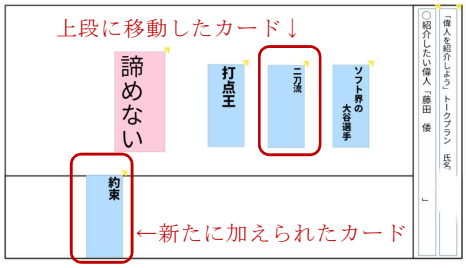



図１　S1 のトークプランの様子

S1 のトークプラン（図１）を見ると、新たにカードを書き込んだり、これまで下段に配置されていたカードを組み込んだりする様子が見られた。目安とした 90 秒よりも短いスピーチになった。工夫したことについては、「家で調べてきたことを事実として付け足して、説得力のあるスピーチにしようとした」と発表していた。今回はピンクのカードを中心的な部分、水色のカードを付加的な部分として扱った。

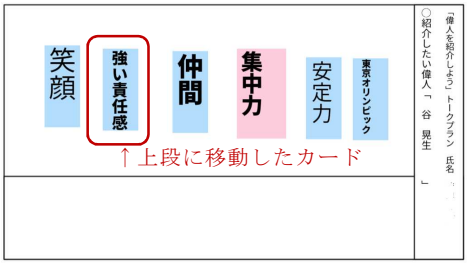



図２　S2 のトークプランの様子

S2のトークプラン（図２）は、これまで下段に配置されていたメモが上段に移動して配置された。90秒というスピーチの条件を満たしていたが、中心的な部分と付加的な部分の境目が曖昧なままになっており、用意したカードを順序よく配置するに留まっていた。振り返りには、「偉人が好きな理由から話し、自分の興味のあることを伝えようとした」とあった。この時点では、スピーチが短くなってしまったり、中心的な部分と付加的な部分の境目が曖昧だったりしていた生徒もいた。また、支援が必要な生徒の中には、S2のように話したいことを順序よく並べてスピーチをした生徒もおり、話すことに不安がある生徒については必要以上にカードを増やしている様子も見られた。

### (3)　展開２（追究する場面）

構成を考える際に工夫したことや、話し方の工夫などについて生徒に発表させ、全体で共有する活動を行った。

表１　生徒から出された工夫したことの例

| |
|---|
| S1：家で調べてきたことを事実として付け足したことで説得力のあるスピーチにしようとした。 |
| S2：偉人が好きな理由を詳しく話し、自分の興味のあることを伝えようとした。 |
| S3：偉人について発表した後に、自分の目標を付け加えた。 |
| S4：最も伝えたいことを繰り返して、ピンクのカード（中心的な部分）を伝えることができた。 |
| S5：呼び掛けの言葉を入れ、複数の相手の興味を引こうとした。 |

出された考えを全体で共有すると、話し方についての工夫が多く見られたため（表１）、取り入れたい工夫は自分のスピーチに生かしていくことを指示した。条件に合わせて増やしたカードを順番に並べるのではなく、最も伝えたいことがどの部分なのか、話の中心的な部分をはっきりさせてから付加的な部分を考えることを指示し、再度構成を練る活動を行った。

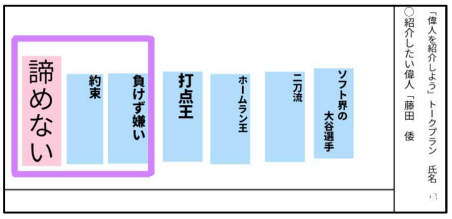



図３　S1のトークプランの変容

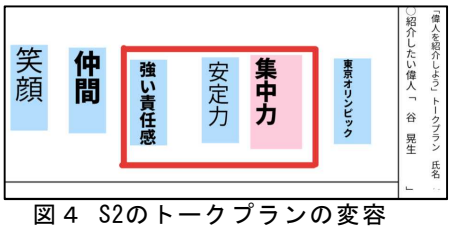



図４　S2のトークプランの変容

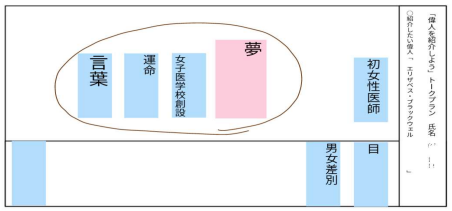



図５　S3のトークプランの変容

S1は、ペアでスピーチを聞き合った際に、相手が問い掛けを効果的に使ったことや、まとめる際に工夫していたことに気が付いた。構成を練り直す活動で自分が最も伝えたいことを考え直し、中心的な部分を最後に伝える構成にして小グループでの発表に臨んだ（図３）。振り返りには「みんなが言ってくれた工夫を基に、カードを増やして工夫することができた」とあり、中心的な部分を考えて構成を練っていた様子が分かる。

S2は、最も伝えたい内容である「集中力」を中心的な部分とし、それに関連付けて付加的な部分のキーワードが書かれたカードを配置し直して赤枠で囲んでいた（図４）。赤で囲むことで、最も伝えたい内容のまとまりと捉えていたことが分かる。また、友達の話し方の工夫を取り入れ、相手の興味を引くために問い掛けをしようとしていた。

S3は、前時までに中心的な部分に記入する言葉に迷っていたが、友達のスピーチを聞いて「夢」と入力した。自分が興味をもっている偉人の前向きな気持ちを中心にして構成を考え、３枚のカードを関連付けて配置していた（図５）。最後には、今後の目標や抱負について自分の思いを話していた。

### (4)　まとめ（まとめる場面）

最後の小グループでの発表では、半数以上の生徒がスピーチの条件を満たすことができ、トークプランをなるべく見ずに相手を見ながら発表しようとしたり、最も伝えたいことが明確に伝わるように中心的な部分の話し方を工夫したりする姿が見られた。生徒の実際の振り返りは以下のとおりである。

○カードを少なくして話したことで、話すことに自信をもつことができた。
○話す内容を一言一句間違えずに話すわけではないため、安心して話すことができた。
○発表では緊張して頭が真っ白になりそうだったけど、友達が話していたことを思い出してそれまでと違う言い方で話すことができた。
○相手が知らないことについては説明を付け足して話すことができた。

## ５　考察

スピーチの構成を考えるためにトークプランを用いたことは、自分が話す文章の構成を視覚的に示すことができたため、意図をもって構成を工夫することにつながったと考えられる。また、自己のトークプランの変容や他者との違いを見て比較させることで、どのような工夫を取り入れたのか、相手の構成にはどのような工夫がされているのかを考えさせることができた。

一方、単元の初めには多くの生徒がカードを順序よく並べてしまったため、中心的な部分を線で囲むように事後指導が必要であった。中心的な部分が明確になるようなトークプランのレイアウトを考えたり、中心的な部分を中心にして左右に付加的なカードを配置させたりするなど、学年の指導事項に応じてトークプランの更なる活用方法を考えたい。

生徒はお互いにスピーチを聞き合い、トークプランを用いて構成を検討し合うことで、構成や話し方の工夫に気付くことができた。対話活動では、目的や状況に合っているのか、それらに合わせてどのような工夫ができるのかなど、意見交流の観点を明確にして活動に取り組むことができていた。今後は共有する機能を活用し、複数の意見を取り入れて構成を練り上げる活動においてもトークプランを活用していくことができると考える。